

へ譲る。閑齋晚年庄兵衛長鏡の名を末子美濃に譲り。閑齋卒後致仕料領二千石を庄兵衛長鏡に譲る。は大聖寺藩今の權丞の祖也。

○北丸

此の曲輪は二丸の北隅なり。故に北丸と稱したりといへども、寛永年中此の地に、東照宮の神殿を造營せらるゝより、世人權現堂とのみ呼べり。北丸の名は、三壺記に、文祿元年城中修築の時、二三丸・西丸・北丸まで人持衆の居屋敷に渡り、各々美々敷屋形を建並べけり。と見ゆ、又元和六年十二月本丸の殿閣炎上の時、利常卿は北丸の山崎美濃屋敷へ退去し給ふ。とあり。此の外にも北丸の名彼は見ゆたり。

○村井出雲長次舊第

慶長の金澤城古圖に、北丸權現堂の地に村井出雲とあり。按ずるに、三壺記に、元和六年十二月廿四日の夜、城中出火の時、利光卿は北丸山崎美濃屋敷へ御入被成。男女共に玉泉院様丸へ入る衆も有り、村井飛驒屋敷へ立退くもあり。と載せたる村井飛驒は、出雲長次が事なるべし。長次

は元祖豊後守長頼の子也。寛文八年の由緒書に、天正十八年秀吉公北條御攻之時、利家様・利長様關東へ御發向。松枝城攻之時、又兵衛嫡子出雲若名左馬助に先手被仰付。八王子城攻之時も、出雲に先手被仰付、一番乗仕。御歸陣之後、利長様より出雲働之次第御感有之、又兵衛方へ御書被下。大聖寺攻之時、高山南坊と出雲と兩人先手被仰付、早く乗入、手負ひ、御歸陣之後二千石御加増拜領仕。慶長十年利家様御息女御千世後春香院殿、利長様より出雲に嫁娶被仰付。出雲儀人持組頭相勤候へども、被仰付年號覺無御座と云々。按ずるに、慶長十七・八年の土帳に、一萬五千石山崎長門・一萬六千九百石村井飛驒、一組の組頭にて、青山豊後・神山主殿・今枝内記・加藤石見等組下也。と見ゆ。

○春香院殿居室

松雲公夜話録に云ふ。天徳院様御在世の内、金澤大火御城燒失の時分、只今御宮有之所に、春香院様の御殿有之。天徳院様には、右之御殿へ御立退被遊候。火事に付俄に天徳院様御移り被遊候處、春香院様御迎ひに御出被成、色々御指圖にて、殊の外の御働きに候由。此御殿も火の粉夥數參

り、火消の面々并に大工抔も屋根へ上り防ぎ候。其内火の粉にて屋根燃立申處、折節水無之候哉、大工之内小便を仕懸火消候。此儀委細今井と申す年寄女中覺罷有、申上候。今井儀は、春香院様に御奉公仕罷在、其節天徳院様御懐胎にて被成御座、右之御殿にて御出産被遊。御月滿不申處、火事に付御働じ被遊御様子に候。御女子にて小姫様と申候處、御虚弱にて御早世被成候由。享保八年五月八日之夜御意也と。三州志來因概覽附録に云ふ。元和六年本丸火災の時、北丸に村井又兵衛の第有りて、春香院殿の居室あり。天徳夫人是へ轉座、春香院殿出迎へ有りて指圖の事、及び夫人此所にて免身の事、委細松雲公享保八年五月八日の夜話に見ゆ。然れども此の時夫人の轉座は、新丸興津内記宅なるよし、諸記に見ゆ。其是非二百年上下を歴、今を以て獨斷しがたしと。平次按ずるに、右は三壺記に、元和六年十二月廿四日の夜御城中奥方より出火、御前様・姫君様・若君様、三丸の興津内記屋敷へ入らせらると見ゆたる故に、

菅家見聞集以下年譜等、皆興津内記方へ退去し給ふよし記載す。興津内記は、幕府より附けられし用人也。慶長七年

十月晦日、城中火災の時も、新丸の興津内記屋敷へ退去し給ふよし、三壺記に載せたり。若しくは慶長七年の時と元和六年の時との事をば、同様に過聞して記載せしにや。三壺記はかゝる誤説多ければ、證としがたし。春香院の事は、前田家略譜に云ふ。高德公第七女千世姫。一作長天正八年五月七日誕生。御母芳春夫人。長而被嫁于細川與一郎忠隆。慶長五年有故離絶。同十年某月日下嫁村井出雲長次。化粧料千五百石賜之。長次死後落飾。稱春香院殿。寛永十八年十一月二十日卒。六十二歳。葬于野田山。無子。養織田河内守長孝子爲長次之嗣。左衛門長光是也と。三州志頭書に、細川氏より離別の後、穩便の通路絶えず。與一郎能州へ來り卒去の後、村井へ再嫁と一舊記にあり。といへり。

○陽廣公等居館

舊藩四世權少將光高卿未だ世子にて幼年にまします頃、北丸に居館し給へり。微陽兩公遺事に、陽廣公御當地北之御丸に被成御座、いまだ御十二・三之御時分、今枝民部申上候。何方へも御出被遊儀希之御儀に候。御亭に而も御普請被仰付、御眺望候て御遊慰被遊可宜哉と奉存候由申上